

ケアセンターけやき

症 例 概 要 利用者氏名：S様（80代 女性 要介護2）

利用期間：平成28年5月～ 通所リハビリテーション

平成28年11月 ～ 特定施設入居者生活介護

経過：息子夫婦と二世帯住宅で暮らしており、1階に夫と二人暮らしをしていました。平成28年5月、転倒防止と外出の不安解消のため週3回けやき通所リハビリを開始となりました。平成28年9月夫が入院したことにより、日中一人になり自宅内で転倒を繰り返すようになり、S様の安全確保とご家族の負担軽減のために平成28年11月けやき特定施設へ入所となる。

内 容

入居当初、排泄について便意はあるものの便座の前でどうしていいかわからなくなっており、毎日のように失禁がありました。トイレに排泄の順序を記載したものを掲示して、介護職員と一緒に読みながら順序を確認、S様ご自身でトイレに行かれるときは見守りにて対応することでトイレの不安が軽減し失禁もほとんどなくなりました。歩行は、不安定でシルバーカーを使用していたが使用を忘れて転倒されることが時々あり、シルバーカーを使用するよう声掛けと見守りを行うことで転倒は減りました。

夜間は、何度も離床され「もう朝ですか?」と話されることが多く、朝と勘違いし着替えようとしました。離床を確認した時は、声掛け、見守り、不安を訴えた時は傾聴することで離床回数が減り睡眠時間がとれるようになりました。そして、施設の生活にも慣れ落ち着いて生活されるようになりました。

平成29年7月、排泄中に誤ってウォッシュレットのボタンを押し、水が出てが止められず驚いてしまいました。それからトイレに対して不安が増し、日中も落ち着きがなくなりました。それまで1月に1回程度だった失禁が、7月は6回に増えました。

介護・看護職員でミーティングを開催し、ケアプランの見直しを実施しました。

S様のご意向は、「お風呂やトイレの不安なく、安心して楽しく過ごしたい。」、ご家族のご意向は、「安心して、施設での生活を送ってほしい。」でした。そこで目標を「自立してトイレに行けるよう自信を取り戻す。」として、トイレの不安を訴えた時は同行し介助を行う。一人でトイレに行けるときはそっと見守りを行う。何か問題が起きそうな時は声掛けを行う。という統一したケアをチームで行うことを徹底しました。

チームでS様の尊厳を大切にしたケアを継続したことで、S様はしだいに自信を取り戻し、失禁はなくなりトイレに一人でいけるようになりました。表情も明るく笑顔が多くなり、他のご利用者に自分から話しかけたり、「次はなにをしようか?」など前向きな発言も多くなり、S様らしく安心して施設での生活を送られています。